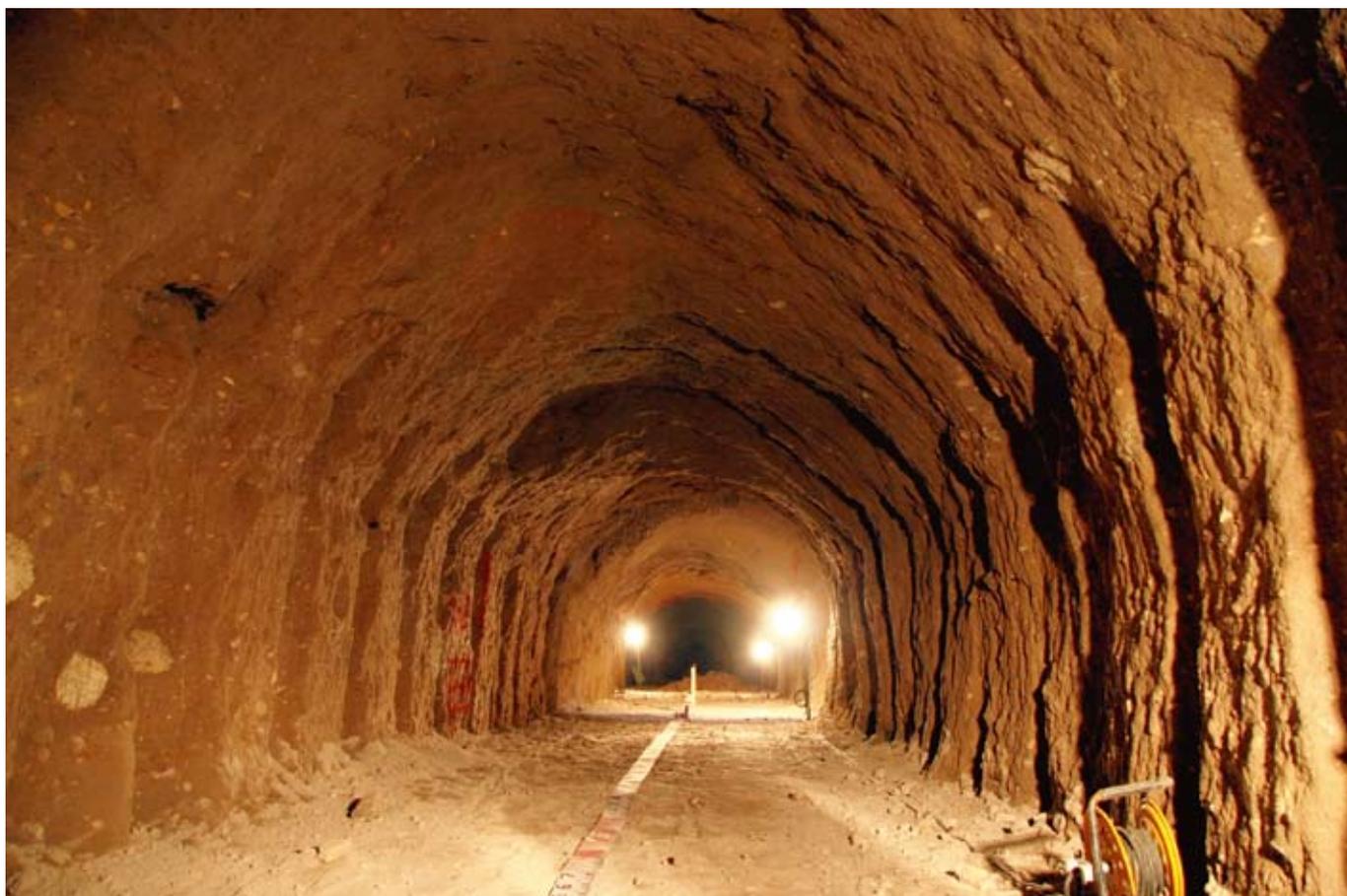




# Newsletter

NO.24

FEBRUARY 2010



鹿児島市田中宇都地下壕

本号では、総合研究博物館スタッフが関わった調査、博物館の紹介を掲載いたします。

前半は、近年、鹿児島市内で工事中に発見された地下壕の地質的・歴史的な意義の紹介です。

後半は中国雲南省、タイ国の博物館の紹介、鹿児島大学の前身の一つ鹿児島高等農林学校の標本室に関する紹介です。

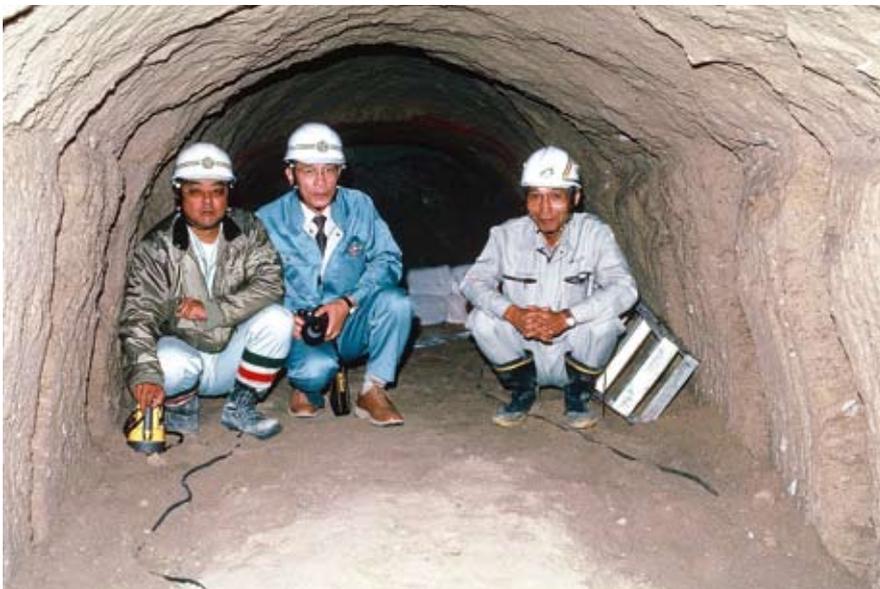
地下壕内のクラシック・ダイクと露頭の活用……………	大木公彦	(2)
鹿児島市田中宇都の地下壕－歴史資料として－……………	橋本達也	(4)
中国科学院西双版纳热带植物园－東南アジアのミュージアム……………	落合雪野	(8)
博物館紹介 タイ自然史博物館……………	Jaitrong Weeyawat	(10)
鹿児島高等農林学校の博物学……………	橋本達也	(12)

## 地下壕内のクラスティック・ダイクと露頭の活用

大木 公彦

鹿児島地域振興局建設部は、急崖斜面に近接した住宅密集地の住環境整備を目的とする急斜面地崩壊対策事業を推進しています。その事業のひとつとして、2007年に行なわれた鹿児島市小野町二丁目の田中宇都3地区の斜面掘削作業の際に地下壕が出現し、内部の壁面にクラスティック・ダイクが認められました。

クラスティック・ダイクは、地震に伴って下位の地層が液状化を起こし、上位の地層の亀裂（板状）に沿って上昇する現象を言います。地震国である日本では、地層中に「地震の化石」として普通に認められますが、震度6クラス以上の地震でなければ発生しないと考えられています。下から貫入した証拠として、ダイクの充填物の淘汰が比較的良く、ダイクの両側に近い部分は摩擦によって貫入速度が遅いため細粒（泥を主体とする）で、真ん中の部分は貫入速度が速いため粗粒（砂あるいは礫を主体とする）になっていることが挙げられます。



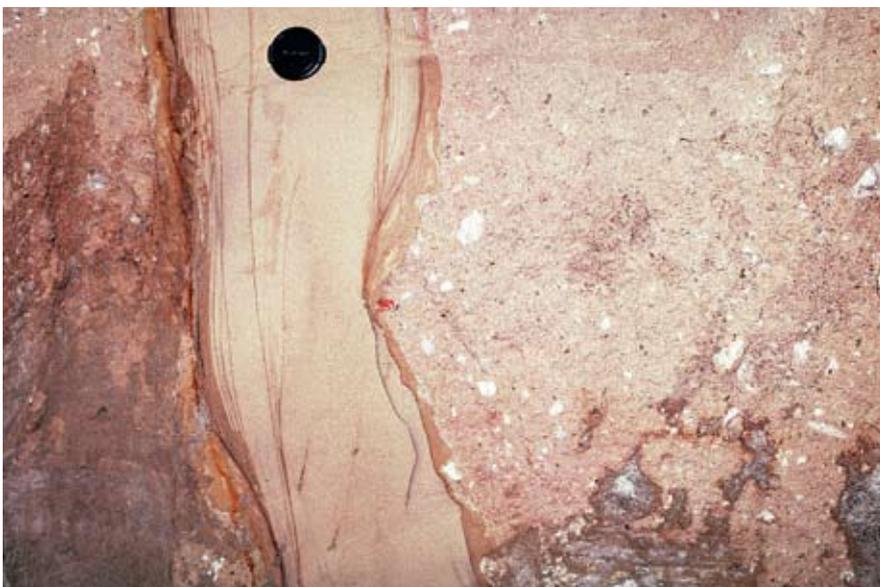
鹿児島市小野町二丁目田中宇都3地区の地下壕  
（奥にクラスティック・ダイクが露出する；左が北側）

### 小野町田中宇都の防空壕内のクラスティック・ダイク

この地域の地質は、下位より下門火砕流、小山田層石井手砂礫部層、加久藤火砕流、海成層の城山層、これらを広く覆う妻屋火砕流・入戸火砕流が累重しています。

クラスティック・ダイクの見られた地下坑道の海拔高度は30mで、妻屋火砕流と入戸火砕流の境界付近に位置しています。ダイクの方（走向）は、ほぼ東西（N 85° E）で、傾斜がほぼ垂直であるため、坑道の左右の壁に縦断面、上下の壁に横断面を見ることができます。ダイクの幅は25cm前後で、両側は茶色を示す1～2cmの細粒なバンドが認められ、その間の部分は肌色を示すやや粗粒な碎屑物からなります。その部分にはダイクに平行な筋が複数認められ、ダイクの縁から内側へ突出した部分では、その突出部より上位の部分に複数の筋が、この突出した部分に収斂するように認められ、下から上へ貫入したことがわかります。

クラスティック・ダイクの左右の細粒部（2試料）、中央の粗粒部（3試料）について粒度分析を行ってみると、細粒部は中粒シルト（中央粒径値：5.2φ、5.6φ）、粗粒部は細粒砂と極細粒砂の境界



クラスティック・ダイクの貫入を示す堆積構造（右が西側）

付近の粒径（中央粒径値：2.9～3.0  $\phi$ ）を示し、左右の細粒部と中央の粗粒部の粒径がかなり異なっていることがわかりました。細粒部と粗粒部の含泥率はもっと明確で、細粒部には79.8%、90.8%の泥が含まれるのに対し、粗粒部では27.3～30.2%と低い値を示しました。

これらの分析結果は、クラスティック・ダイクの両側に近い部分が中央部に比べ、両側の壁との摩擦によって貫入速度が遅いことを裏付けています。

### 小野町田中宇都のクラスティック・ダイクの重要性

妻屋・入戸火砕流を切るクラスティック・ダイクは、県内の多くの場所で見ることができますが、単位面積で考えると極めて少ないものです。また、幅が25cmをこえる妻屋・入戸火砕流を切るクラスティック・ダイクは鹿児島市では報告がありません。鹿児島市田中宇都で見つかったクラスティック・ダイクは規模が大きく、

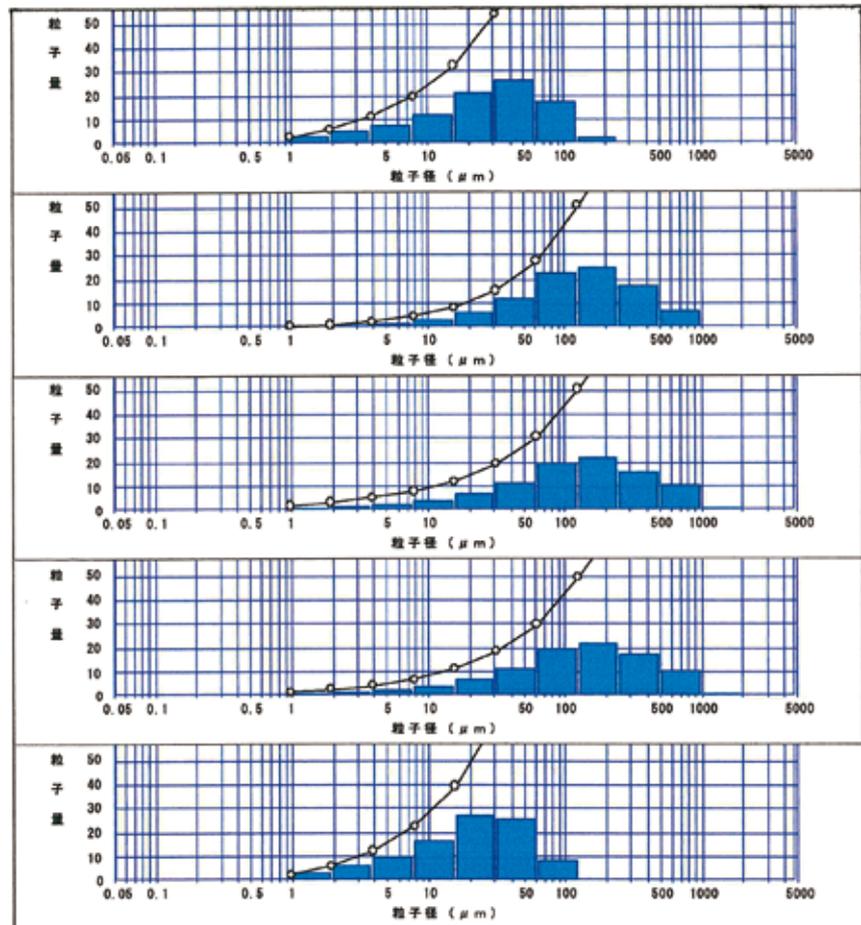
明らかに下方から上方へ貫入した構造が残されている点で、貴重な液状化の証拠です。このクラスティック・ダイクは、1) 規模が大きく、貫入時の構造を良く残していること；2) 入戸火砕流堆積物を切っていることから、この火砕流の年代である約3万年以降に生じたことがわかること；3) クラスティック・ダイクは東西方向に延びており、鹿児島市でこれまでに認められたクラスティック・ダイクの方向性と異なり、地震発生のメカニズムを知る上で重要であることから、このクラスティック・ダイクの認められる露頭の現地保存が望まれます。また、防災教育・研究だけではなく、田中宇都の防空壕そのものも戦争遺産として保存し、平和教育に活用されることが望まれます。

過去、多くの研究者によって地形地質に関する研究報告が公表されてきました。しかし急速な都市開発や過疎化による自然荒廃等によって露頭が失われ、再調査を行なってさらに研究を深めることに支障をきたしています。鹿児島大学総合研究博物館では、2003年度、2004年度の2年間、文部科学省「地域貢献特別支援事業」に採択された生涯学習プロジェクト「鹿児島フィールドミュージアムの構築」を推進し、現在も博物館の重要なプロジェクトの一つとして活動しています。今後もこのプロジェクトを継続し、失われつつある様々な文化遺産の保全に努め、それらの情報を集積すると同時に、この情報をネットワーク化し、現場で本物と接することのできる博物館として活動を展開したいと思います。

報告にあたり、鹿児島地域振興局建設部の許可を得ました。こころよりお礼を申し上げます。

### 参考文献

大木公彦・中島一誠・内村公大、2009：地下壕内のクラスティック・ダイクと露頭の活用。鹿児島県地学会誌、95：17-26。



クラスティック・ダイクの試料の粒度分布（上から下へ、東側の細粒部、東側の粗粒部、中央の粗粒部、西側の粗粒部、西側の細粒部；縦は各粒度の含有量%、横は堆積物の粒径 $\mu\text{m}$ ）

## 鹿児島市田中宇都の地下壕－歴史資料として－

橋本 達也

2007年、鹿児島市小野2丁目の法面工事作業にともなって、三角形に突き出した丘陵先端部を利用して縦横にくり抜いた巨大な地下壕が発見されました。さらに2009年にはその下方で、もう1基の地下壕の存在が確認されました。本号では、大木公彦館長が地質学的な意義を紹介していますが、ここではその歴史資料としての側面に焦点を当てます。

鹿児島は太平洋戦争にともなう地下壕が全国で最も多い地域です。南に位置し前線に近かったこととともに、広大なシラス台地は地下壕を掘りやすかったことなどがあるようです。

2005年4月、鹿児島市の地下壕で中学生が死亡する痛ましい事故が発生しました。これを受けて国が中心となって全国的な調査を行い、対策として埋め戻しや入り口の封鎖などの措置が進められてきています。この2005年度の全国調査の時に、鹿児島県内では3149箇所地下壕が確認されています。全国で確認された地下壕は10280箇所ですので、約3割が鹿児島県に集中し、突出しています。さらに、このうち鹿児島市が1055箇所、



地下壕遠景（中央の法面にある）

県内でも圧倒的な集中を見せています。ちなみに、2番目に多い宮崎県では744箇所です。鹿児島市だけで宮崎県全体よりも多いのです。なお、鹿児島市の地下壕のうち、危険性が高いと判断されたのは13箇所ですので、緊急対策が必要なものは比較的少ないようです。

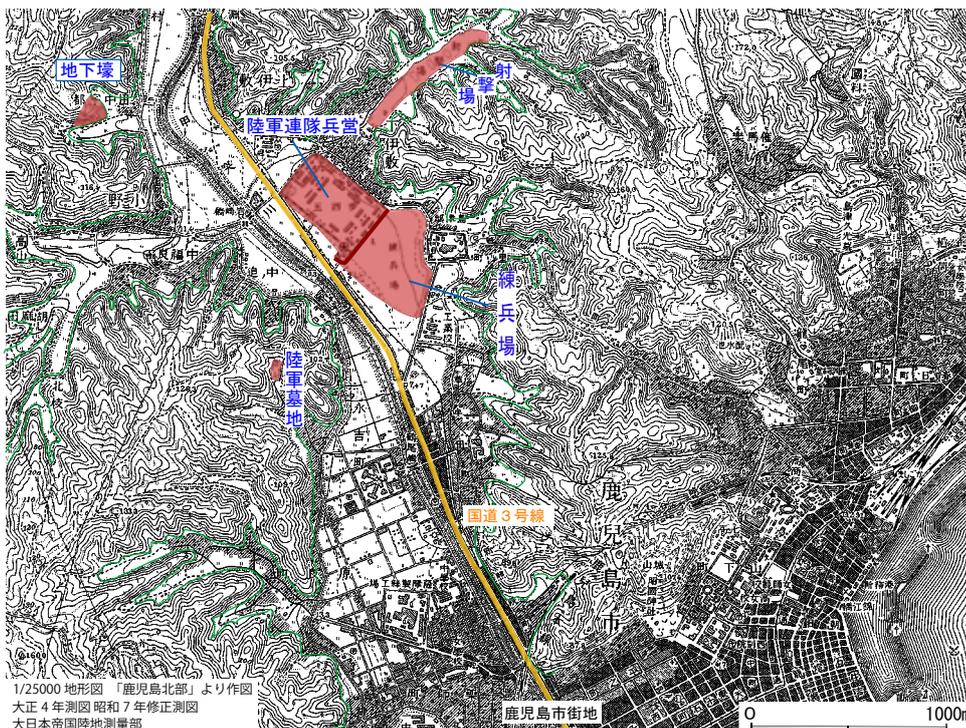
もちろん緊急性の高い危険な地下壕もなかには存在しますが、しかし、これらは太平洋戦争という日本史上に大きな位置を占める歴史を反映した遺跡です。そこに歴史の証人としてや教材としての役割もあります。ただ危険であるからといって調査もしないで埋め戻してしまうことは過去から学ぶための貴重な資料の滅失につながります。戦

争を実感として体験できる場であり、このようなものを必要とした時代、社会から学ぶことは少なくないと思います。

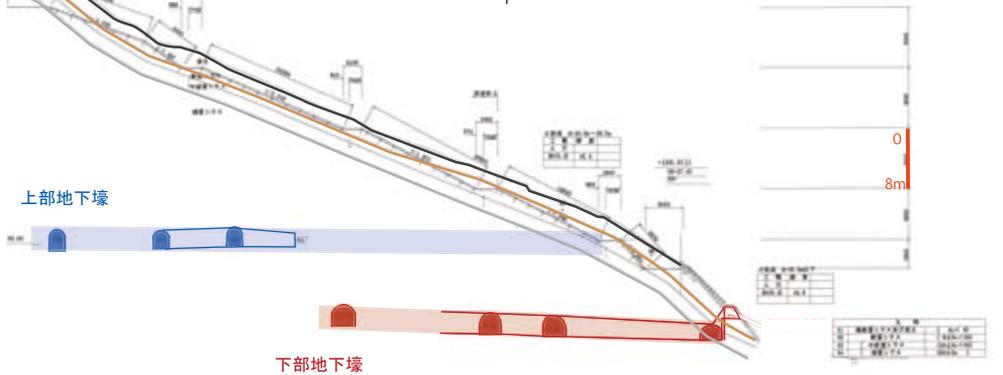
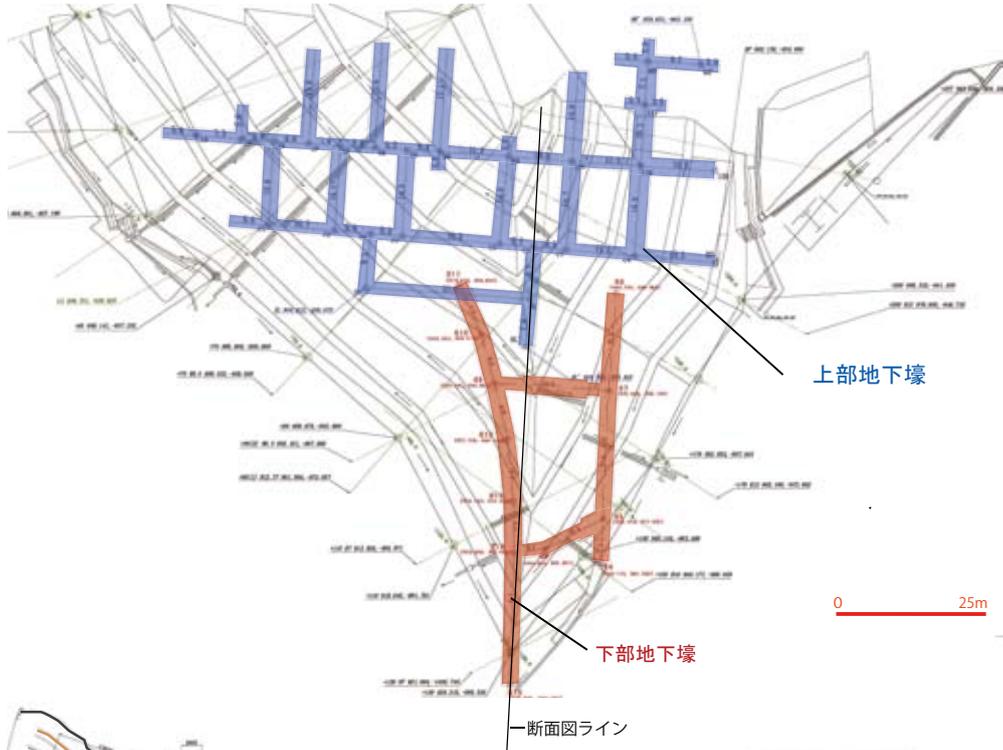
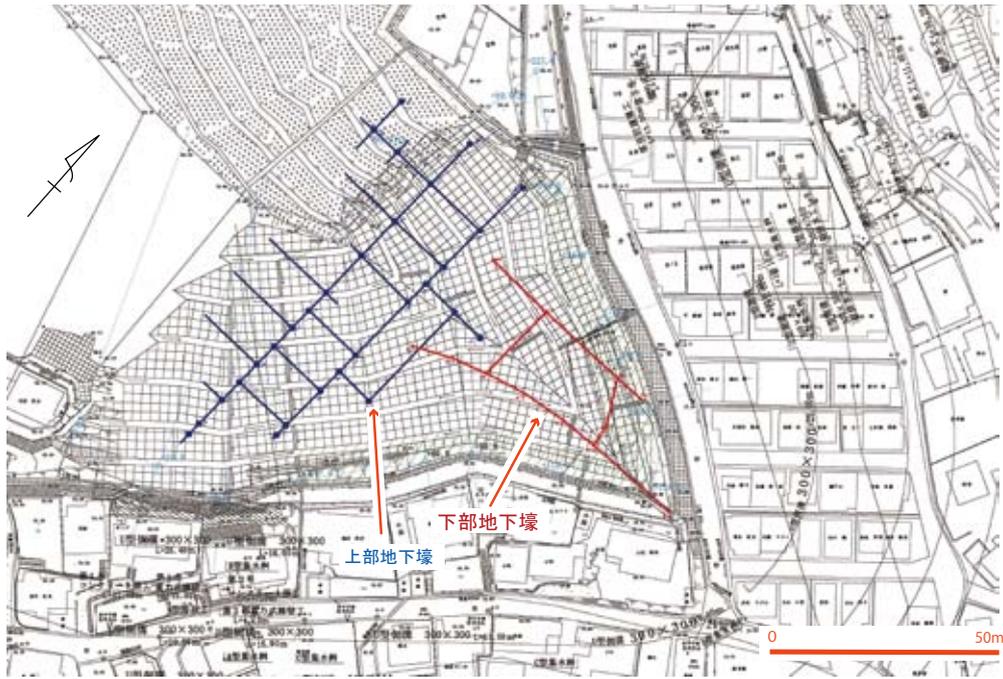
まずは、そういったことを考える事例の一つとして田中宇都地下壕をここでは紹介してみたいと思います。

### 地下壕の構造

急傾斜地の法面工事に伴って発見された地下壕は、上部・下部2つの地下壕からなり、もともとセットで造られたとみて良いでしょう。一部、上下に重なるところがありますが、ほぼ重ならず、



田中宇都地下壕と周辺の軍事施設



田中宇都地下壕図



最も高い場所



平天井部

上部は南北軸を長く、下部は東西軸を長くする2本の主要坑道を基本として構築されています。方位は、若干のズレがありますが、正方方位を基準に設計されているとみて良いでしょう。

上部の地下壕は長さ約91m・79mにもおよぶ南北2本の主要坑道と、それを結び、またさらに延長するように東西の坑道が多数掘り抜かれています。坑道の平均的な幅は2m、高さは2.4mあり、東側部分などでなかにはこれより狭い場所もあります。また、もっとも中心的な出入口であったと見られる場所は高さが4.4mにも達しています。

その壁面にはほとんどの箇所では支保工を設置したと見られる痕跡が残っています。また、天井の高さはこれらの規模および支保工にかかる造作などを見ると、一時的な仮施設などではなく、相当に大規模な施設事業としてその造営のなされたことがうかがえます。

下部地下壕は少し折れ曲がる67.5mの坑道と直線的な44.6mの東西坑道、それらを結ぶ南北坑道からなっています。坑道の平均的な幅は2.8m、高さは2.8～3.0mあり、上部地下壕よりも大きく造られています。

### 地下壕の用途

この地下壕にはどのような目的があったのでしょうか。地元では「野戦病院用の壕」とあるという人がいると聞きますが、現在、この地下壕に関する記録は確認できていません。また、その掘削に直接関わった人も確認されていません。ですので、現状ではその用途は確定できません。市街地からかなり離れた谷奥であることも「病院」に相応しいのか疑念の生じるところです。

地下壕には、町内会等で作る場合、自治体がつくる場合、軍がつくる場合などがあります。この地下壕の性格を知る上で注目できるのは、近在した日本陸軍の兵営です。直線距離で約1km、現在の鹿児島県立短期大学、県立西高校、鹿児島市立伊敷中学校一帯の土地は戦前、旧陸軍兵営および練兵場でした。ここでは歩兵第45・71・145・227連隊が編成されていました。

また、戦前の地図を見る限り、草牟田より北の甲突川流域は小規模村落が点在する状況で、他に公共施設のようなものは設置されていません。町内会等での構築物とは考えがたく、また規模もきわめて大きいことからすれば、この地下壕は下伊敷に拠点を置いた旧日本陸軍との関係を想起して良いと思います。

### 使用状況

壕内を観察したところ、当初設置されていたとみられる支保工もほぼ現存していません。また、床面は多くが天井や壁の崩落土によって、ある程度埋没しているため、正確を期しがたいのですが本地下壕では以下のような点に注目できます。

- 1) 灯火施設などの痕跡が見られない。
- 2) 掘削痕以外の施設使用に関わる痕跡がみられない。
- 3) 壕内はいずれも直線的な通路状を呈し、室としての間取りがみられない。
- 4) 利用に関わる当時の廃棄物など残留遺物がみられない。

これらのことは、この壕が実際に機能したかどうかは不明確で、むしろ実際には使われていない可能性を考えておいた方が良さそうに思います。

実際に使用していないとなると、なぜこのような地下壕が存在するのでしょうか。この壕が放棄される終戦時には未完の施設だとすると、想起されるのが昭和20年11月にも計画された、アメリカ軍の本土上陸作戦に備えた陸軍関連の待避所等の施設である可能性があります。九州南部のアメリカ軍上陸作戦であるオリンピック作戦に対して、それに備えた施設づくりも資材不足で十分な作業はできない中、実施されたとみられます。

本地下壕はアメリカ軍上陸作戦が準備されるという緊張した戦況の中で急遽、陸軍施設用地下壕として造成が始まったものの、8月に終戦を迎え、実際には使用されなかったとみるのが現状ではもっとも可能性の高い推定ではないかと考えます。まだ、鹿児島県の旧陸軍関係資料などを精査していませんので、今後明らかにする必要があります。



ドーム型の天井（支保工なし）

## まとめ

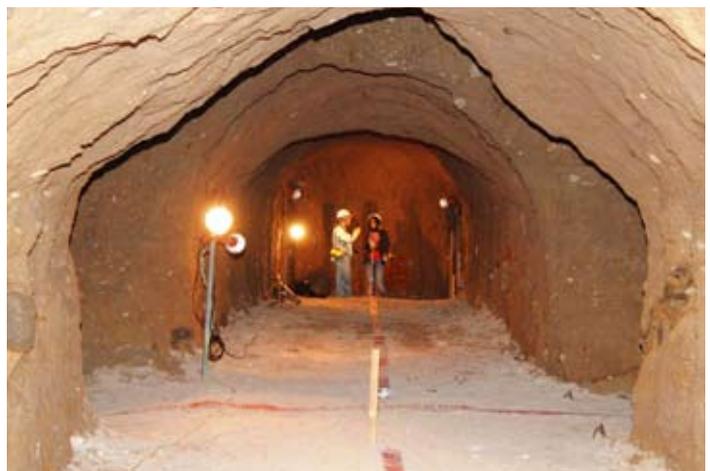
田中宇都地下壕のきわめて大規模な施設でありながら、現状でその役割は不明です。しかしながら、これはこの地域に陸軍の施設が造営され、緊張する戦況との関連があって存在するものであることは動かないでしょう。また多大な労力を投入した歴史的モニュメントとって過言でなく、近代日本の経験した最も重要な歴史的事象である太平洋戦争の歴史遺産であることは間違いありません。

この空間に触れることで戦争の存在をリアリティをもって体感することができ、より深く過去を学び、平和を考究する契機を与えるものと思います。関係機関の努力、工夫によって本地下壕は法面工事の強度に影響を与えない部分が空洞として残されています。いずれ、本地下壕が歴史遺産として学習教育・研究として活用されることを期待してやみません。

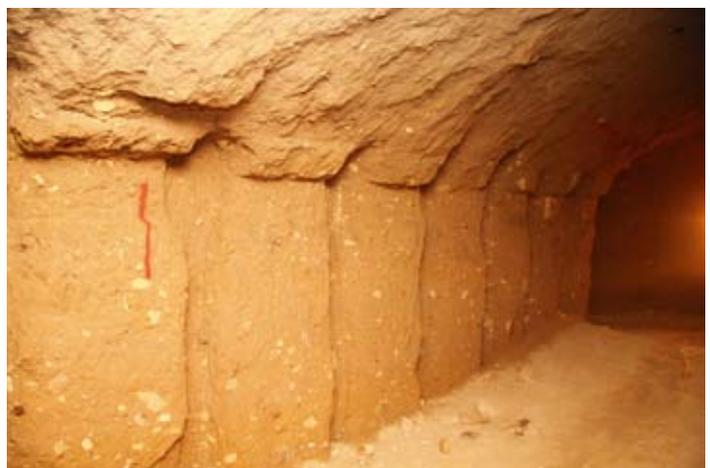
2007年12月4日に田中宇都地下壕の内部を観察する機会を得ました。見学およびここでの紹介にあたっては、鹿児島地域振興局および(株)徳一建設、とくに中島一誠氏のご協力を得ました。

2005年度の国土交通省を中心とした調査データは下記のサイトで公表されています。

<http://www.mlit.go.jp/crd/city/sigaiti/tobou/chikago.htm>



三角天井部



支保工の痕跡

## 中国科学院西双版纳热带植物园—東南アジアのミュージアム

落合 雪野

筆者の研究対象地である東南アジアでは、それぞれの土地の歴史や社会の状況を反映して、味わい深いミュージアムがつくられていることが多い。現地調査や会議のために海外出張した際には、地元のミュージアムを積極的に訪問している。今回はそのうちのひとつ、中国科学院西双版纳热带植物园を紹介したい。

中国科学院西双版纳热带植物园 (Xishuangbanna Tropical Botanical Garden、以下XTBG) は、中国雲南省西双版纳傣族自治州景洪市の東部に位置している。雲南省は中国の南東端にあり、ミャンマー、ラオス、ベトナムといった東南アジアの国々と国境を接している。その雲南省のなかで、最も南にあるのが西双版纳傣族自治州である。この自治州では、タイ語系の言語を母語とする傣族を中心に多くの少数民族が生活しており、隣接する東南アジアの国々と共通した生業や文化がみとめられる。



1 斐盛基博士

2009年11月、雲南省昆明市で開催された国際会議「アジアにおける森林の伝統知識と文化」に出席した際、XTBGを訪れる機会を得た。この会議は中国科学院昆明植物研究所が主催し、同研究所の斐盛基博士が開催責任者をつとめていた。民族植物学者の斐博士(写真1)は、XTBGに建設期から在職していた先駆者のひとりで、1959年に開園した後は2代目園長としてその発展に尽力してきた。この斐博士や陳園長をはじめとする職員と議論しつつXTBGを見学できたため、充実した機会となった。

まず、施設を概観してみよう。XTBGでは、総面積1,100haの園内に約12,000種の植物が収集されている。川に囲まれた半島状の地形を活かし、エントランス区、西部区、東部区の3区分から構成されている。エントランス区には、駐車場、チケットオフィス、ビジターサービスセンター、土産物売り場がある。来園者はここでチケット(大人80元=約1200円)を購入して入園する(写真2)。専門の教育を受けたツアーガイドに案内を頼むための窓口もある。エントランス区から橋をわたると西部区(写真3)に入る。西部区は展示区域であり、樹木園、ヤシ園、水生植物園、熱帯果樹園、薬草植物園などの植栽園が配置され、その中に熱帯雨林民族文化博物館、ホテル、レストラン、研究所(写真4)などが点在している。それぞれのスポットを通路が結んでおり、来園者は歩いたり、電気自動車に乗ったりして自由に散策することができる。東部区は、熱帯雨林の植生をほぼそのまま残した保全区域として、西部区に隣接して設定されている(写真5)。コテージ型のビジターセンターを起点に歩道が整備され、そこをたどって熱帯雨林の景観や代表的な植物を見学するしくみになっている。一部には、ラン科植物やショウガ科植物のコレクションもある。



2 チケットオフィス

3 西部区



3 西部区

つぎに、活動の特徴をあげてみよう。第一は基礎研究である。103名の研究者が在籍し、保全生物学、森林生態学、資源植物学の3部門にわかれて、おもに生物多様性に関する研究をおこなっている。欧米人研究者の雇用や国際シンポジウムの開催など、国際交流もさかんである。現在、新しい研究施設の建設が進んでおり、今後とくに遺伝子保全の分野に力を入れていく計画だそうである。

第二は実用研究である。開園以来、材木となる樹木や柑橘類などの果樹、薬用植物など有用植物の導入を主導し、地元の林業や農業に貢献してきた。最近の課題はアグロフォレストリーの確立である。雲南省では、天然ゴムをとるためのパラゴムノキの栽培が1960年代に開始されたが、そのプランテーションが近年急速に拡大して問題になっている。このため、住民の経済活動と森林景観保全のバランスがとれるような、アグロフォレストリーの方法が模索されているのである。

第三は観光地としての成功である。雲南省は観光地として注目されており、熱帯の景観や少数民族の文化をもとめて中国沿岸部から多くの観光客が訪れている。XTBGは、西双版纳傣族自治州の代表的な訪問地としてガイドマップ等にも掲載されており、年間50万人の来園者実績がある。エントランス区が大型バスの団体客に対応した構造に改装されたことや、西部区がレジャーやリクリエーションにふさわしい構成になっているのはこのためである。

研究機関としての実績をあげつつ、同時に来場者数を増やすことは、あらゆるミュージアムに求められている共通した課題であろう。その両立を、一気に実現するかのようなXTBGの勢いに驚かされた。中国の経済成長と豊富な人材がそれを可能にしていくのだろうか。また、東南アジア大陸部の生物多様性保全に関して、雲南省に隣接する国々の関係諸機関とXTBGが、今後いかに連携していくのかに注目したい。現在、中国、ミャンマー、ラオス、ベトナムの国境域で、これだけの規模で研究や保全の活動ができる植物園はほかになく、XTBGが長期的にリーダーシップを発揮する必要があると思われるのである。

XTBGを訪問する機会があれば、とにかく広大な園なので、時間をかけて見学することをおすすめしたい。日中の気温が高い時間帯には、熱帯雨林民族文化博物館を訪れるのがよいだろう。自然史と民族文化に分けてそれぞれの分野のポイントを的確に展示しており、立体標本や物質文化資料は見応えがある(写真6)。西部区の売店には、書籍やハンディクラフト、薬用植物を活用した商品などが置いてあるが、残念ながら充実しているとはいえない。いっぽう、エントランス区の土産物売り場は市場形式になっていて、住民が農産物を持ち寄って販売している。地元の植物利用の一端に触れることができるという点で、こちらがXTBGならではのミュージアムショップになっている。



4 研究所



5 東部区



6 熱帯雨林民族文化博物館

## 博物館紹介 タイ国立科学博物館・自然史博物館

### Weeyawat Jaitrong (タイ国立科学博物館・自然史博物館 学芸員)

2009年10月より鹿児島大学理工学研究科博士後期課程に在籍されているウィーヤワット・ジャイトロン (Weeyawat Jaitrong) さんに、タイ国立科学博物館・自然史博物館の紹介をしていただきます。ウィーさんはこの博物館の学芸員です。また、2009年に開催しました第9回特別展「小さなアリの大きな世界」では、支援者として数多くのご協力をいただきました。(福元しげ子)



Jaitrong Weeyawat

### タイ自然史博物館について

タイ国立科学博物館 (NSM) はタイの全ての人々の科学の知識向上のため、タイ王室の命により1989年に設立されました。科学諸分野の成果を国内外の来館者のために展示したり、科学上の資料や標本を収集するのが主な目的です。タイやタイ自然史博物館 (THNSM) は、タイ国立科学博物館の管轄のもとに設立され、タイと隣接している国々の動植物の調査と研究という活動に特化しております。自然史博物館はこれまで数年間にわたって、この地域の生物多様性を、種、生息地および遺伝的多様性の観点から研究してきました。

自然史博物館では、植物と動物の分類・生態・生物地理に関する研究を行っています。研究はタイと南東アジア諸国全域をカバーし、博物館の専任スタッフとともに天然資源環境省からの専門職スタッフと共同で行われています。たとえば、国立公園、野生動植物局、海洋・沿岸資源局、天然資源・環境政策計画局のスタッフや、タイ科学技術研究所の研究者などです。

タイ自然史博物館は、他国の自然史博物館と比較して歴史は浅いのですが、植物や動物の分類研究のために必要な人材と機器を備えています。現在、研究スタッフは13名います。そのうち11名は動物および植物の分類に関する仕事を主としておこなっています。それぞれの専門は以下の通りです。

2人の植物学者：イネ科とスゲ科、イチジク類。  
9人の動物学者：鳥類と哺乳類、両生類とは虫類、淡水魚、昆虫（チョウ類、ガ類、アリ類、トンボおよび甲虫類）、海産無脊椎動物（棘皮動物と軟体動物）。

自然史博物館には、植物ではタケを含むイネ科、スゲ科、イチジク類、動物では変温動物のといった代表的なコレクションがあります。標本点数は植物がおよそ3000点、動物がおよそ5万点です。それらの大部分については目録が整理されており、コンピュータに入力されています。

また、スタッフや分類に従事する研究者が利用可能な参考図書がそろっており、その中には



タイ自然史博物館



スズメバチの展示コーナー

なかなか手に入らない本も多く、地域ごとの動植物相に関する数千の別刷りも含まれています。

20世紀に入って以降、人間活動、生息域の破壊により生物種が脅かされ、種の絶滅が起きています。熱帯林地域は固有種の比率と生物多様性が非常に高いと同時に、その多くは人口爆発地域の近くにあるため、人間活動の増大により固有種の生存が危機にさらされているのです。一方では、名前が知られてない未記載種が多数あると考えられます。生物多様性の保全のためには、近隣諸国との共同によるネットワーク構築が急がれます。

自然史博物館は東南アジア諸国の調査・研究と情報収集のセンターとしての役割も担っています。

## 博物館での仕事について

私の博物館業務の中心は研究活動・収集活動・展示活動です。タイ国内をはじめ東南アジア諸国の昆虫・両生類や虫類標本の収集、標本の作製、同定およびそれらの整理・保存に関する仕事です。また来館者への解説はもちろんのこと、展示の準備に関するさまざまなことにも携わっています。

このたび鹿児島大学大学院理工学研究科博士後期課程に進学した理由は、昆虫（とりわけアリ類）に関する生物多様性研究と分類作業の更なるレベルアップを目指して、山根正気教授に指導を受けるためです。私が昆虫の中でもアリ類にこだわるのは、熱帯林においてはアリ、シロアリ、アシナガバチなどの社会性昆虫の生物量（バイオマス）が全昆虫の3/4を占めると言われているからです。アリは生物多様性の代表格ともいえるのです。アリ類を調べたり、知ることが生物多様性を理解することにつながると思うからです。

来日以来、本国のアリ類をはじめとする標本の同定と、鹿児島県周辺地域で採集した昆虫（ハチ類、アリ類ほか）の標本の同定および標本の作製を指導教員の山根教授のもとで行っています。博士論文のテーマは「東洋区におけるヒメサスライアリ属の分類学的再検討と生物地理」です。

## 今後の抱負

私は、在学中にテーマである生物多様性の研究に励むのはもちろんのこと、我が博物館が国際的な博物館に発展すべくタイ・東南アジア諸国の昆虫をはじめとする動物の分類や生態をより深く知るようにトレーニングを積み、そのことを本国の博物館に還元し、展示や解説で活かしたいと思っています。

みなさん、どうぞよろしくお願ひします。



常設展の一部



アリの標本庫



ほ乳類の展示

# 鹿児島高等農林学校の博物学

橋本 達也

鹿児島大学の前身の一つ、鹿児島高等農林学校は「南方発展」とする資源の開発を目的として、1909（明治42）年に日本の農学博士第1号の玉利喜造を初代校長に迎えて開校し、2009年には100周年を迎えました。現在も鹿児島大学農学部には高等農林学校時代の多くの資料が残されています。その中にはアルバムなどの写真資料もあります。

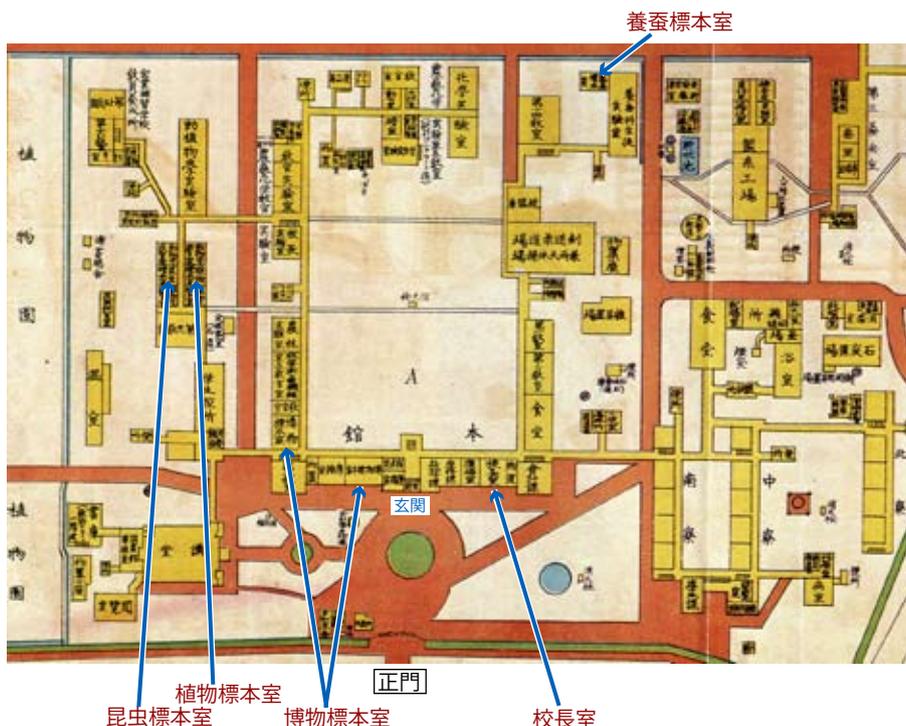
総合研究博物館でも、寄贈等で高等農林学校時代の資料を扱うことが良くありますので、関連する事項を調べる必要があります。とくに、



動物標本

アルバムには多くの情報が詰まっています。非常に興味深いものがあります。そんな中から、ここでは博物館と関係の深い、高等農林学校のアルバムに残された標本の写真を紹介します。

鹿児島高等農林学校では1915（大正4）年に、大正天皇即位を記念して、南洋博物館が設置されています。ここでははじめ1914年の調査で収集したミクロネシアの動物・植物・産業・教育に関する標本の展示からはじまり、後にマレー諸島や台湾などの資料も加えたとのことです。



農学標本室  
農林学標本室  
林学標本室

鹿児島高等農林学校の標本室

また、1919（大正8）年の創立10周年記念式典の際に玉利喜造校長は式辞のなかで、「当校の如き専門学校に於ては他に得べからざる貴重の図書標本の多数を蔵するを以てその学校の価値を定むべし」としています。さらに続けて、人には寿命があり、また職を替えることや優秀な人材でもその能力を発揮できなければなんの役にも立たない、しかし図書や標本を所蔵していれば広く学者や研究者が集まってくるのでその役割は永久的である、とまで言っています。

だから、専門学校の価値はその専門に関する図書・標本を多数所蔵することである、その見解を抱いて開校以来、熱心に尽力して多く図書・標本が集まってきたと。

学校の顔として標本を重視していたことは部屋の間取りからもうかがえます。昭和11年頃の鹿児島高等農林学校の図を見ると、学校を代表する建物「本館」の1階正面の向かって右翼には校長室・応接室があり、対する左翼は応接室と博物標本室が並んでいます。標本室は学校の象徴ともいえる場所にあるのです。

さらに、本館正面2階の校長室の直上が、農学・林学・農林学標本室となっており、やはり学校の要所に標本室を当てています。ほかにも植物・昆虫・養蚕標本室など、各教室ごとに標本室が設けられています。いかに高等農林学校が、実物資料に基づいた実学教育を重視していたかがうかがえます。そしてそれら標本室内とみられるのが、ここに掲載する写真です。

本館が昭和20年6月17日の鹿児島大空襲の際に焼失してしまったことから、多くの標本は今に伝わっていません。焼失しなかった建物にあった植物標本は今も現存し、南西諸島などの地域において長期にわたって収集された植物標本を多数含む貴重コレクションとして知られています。鹿児島大学に重要コレクションが形成されてきた背景にも先人達の意欲的な努力の積み重ねの歴史があるのです。



鉱物標本



農学標本



農学標本（手前は養蚕標本）



林学標本

戦争による焼失はどうにも取り返しが付きませんが、貴重な標本群が灰燼に帰したことも記憶しておくべき歴史の一コマです。また今、あらためてさまざまな標本が危機に陥りかねない状況が鹿児島大学ではよく起こります。それはスペースがないことに起因することが多いのですが、一見、先端的でない古いものを大事にしないという風潮があるように思えます。他にない多くの資料を保有することは大学の重要な資産です。失ってからでは取り返しが付きません。あらためて、鹿児島大学の役割を考える時、玉利校長の精神に学ぶところは少なくないと思います。

## 2009年度活動の記録

### 大学博物館等協議会2009年度大会・第4回 博物科学会

5月21日(木)～22日(金) 鹿児島大学郡元キャンパス 理工学系総合研究棟2F プレゼンテーションホール

#### 第9回 公開講座「アジアの中の日本－稲作文化から考える－」

5月30日(土) 13:30～15:30 鹿児島大学郡元キャンパス 総合教育研究棟2F 203号室 入場無料  
田中耕司(京都大学地域研究統合情報センター・センター長)

#### 第16回 市民講座「カンボジアの自然」

7月11日(土) 13:30～16:00 鹿児島大学郡元キャンパス 総合教育研究棟2F 203号室 入場無料  
塚脇真二(金沢大学環日本海域環境研究センター・准教授)  
「カンボジアのトンレサップ湖－アンコール文明をはぐくんだ湖－」  
荒木祐二(東京大学アジア生物資源環境研究センター・特任助教)  
「湖に沈む森のしくみと人のかかわり」  
本村浩之(総合研究博物館准教授)「巨大湖にくらす魚の不思議」

#### 第9回 自然体験ツアー「わたしも今日からアリ博士」

7月18日(土) 9:00～15:00 日置市伊集院町城山公園 対象：小学4年生以上おとなまで 30名  
山根正氣(鹿児島大学理学部教授)・原田 豊(池田高校教諭)

#### 第14回 研究交流会「世界ジオパークとフィールドミュージアム」

10月3日(土) 13:30～16:00 鹿児島大学郡元キャンパス 総合教育研究棟2F 203号室 入場無料  
福島大輔(NPO法人 桜島ミュージアム理事長)「桜島をまるごと博物館とする取り組み」  
大木公彦(総合研究博物館教授)「フィールドミュージアムの構築」

#### 第9回 特別展「小さなアリの大きな世界」

11月4日(水)～12月8日(火) 10:00～17:00 (日曜日休館) 入場無料  
鹿児島大学郡元キャンパス総合教育研究棟2F プレゼンテーションホール

#### 第17回 市民講座「小さい生命を撮る」

11月14日(土) 13:30～15:30 鹿児島大学郡元キャンパス 総合教育研究棟2F 203号室 入場無料  
栗林 慧(昆虫写真家)

#### 第5回 学内コンサート「ヴァイオリン・チェロ・ピアノの調べ」

11月15日(日) 13:30～14:30 鹿児島大学郡元キャンパス 総合教育研究棟1F エントランスホール 入場無料  
久保吹音(Violin)・有村航平(Cello)・植村富士子(Pf)

2010年度も、さまざまな企画を行っていきます。追って広報いたします。楽しみにお待ち下さい。

鹿児島大学総合研究博物館 News Letter No.24

■発行/2010年2月15日 ■編集・発行/鹿児島大学総合研究博物館 〒890-0065 鹿児島市郡元1-21-30

TEL: 099-285-8141 FAX: 099-285-7267

http://www.museum.kagoshima-u.ac.jp/